第18回イコモス総会における「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の事例報告

岡寺未幾・仲谷隆造

1.経緯

平成26年11月9日から15日にかけてイタリア・フィレンツェで第18回イコモス総会が開催された。イコモス(国際記念物遺跡会議)は文化遺産の保護に関わるNGOであり、ユネスコの諮問機関として世界遺産登録の審査を担っている。総会は3年に1度開催され、世界中のイコモス会員が集う機会であり、今回は94ヶ国から1650名が参加した。

平成29年の世界遺産登録を目指す「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議は、この機会に情報収集し、今後の世界遺産登録に向けた対策を検討するため福岡県世界遺産登録推進室より3名(仲谷事務主査(前福岡県サンフランシスコ事務所長)・岡寺技術主査(考古学)・松本主任技師(建築史))が派遣された。

総会は、イコモスの活動方針、予算、会長・副会長・理事の選挙をはじめとする事務的な会議と合わせて学術シンポジウムが行なわれる。今回のシンポジウムのテーマは、「Heritage and Cultural Landscape as Human Values(人間の内面の価値としての遺産と文化的景観)」である。このテーマの下に、更に5つのテーマが設定された。「テーマ1: Sharing and experiencing the identity of communities through tourism and interpretation(観光とインタープリテーションを通した地域社会のアイデンティティの共有と経験)」「テーマ2: Landscape as cultural habitat(文化的ハビタットとしての景観)」「テーマ3: Sustainability through traditional knowledge(伝統的知識を通じた持続可能性)」「テーマ4: Community-driven conservation and local empowerment(コミュニティ主体の保存と地域力の向上)」「テーマ5: Emerging tools for conservation practice(保全を実践するための緊急ツール)」

この学術シンポジウムのテーマは総会の約1年前に公表され、イコモスは応募した提案を審査する。「①Very Pertinent(412)」「②Pertinent(658)」「③General Interest(203)」「④Deleted/Rejected(26)」の4段階で評価し、このうち①・②は「Total Admitted(1070)」として受理される、③・④は「Total Rejected(229)」として不受理となる。

提案が受理された者は、次に論文を提出する。論文は再度、以下の5段階に評価される。「①Excellent」「②Very Good」「③Good」「④Fair」「⑤Rejected」このうち、①・②はプレゼンテーション(口頭発表)、③・④はポスターセッション(パネル掲示)を行なうことができ、⑤は不受理である。このような手続きを経てシンポジウムでのプレゼンテーションが決定する。

シンポジウムは総会に出席するイコモス関係者に直接資産の説明ができる絶好の機会であることから、世界遺産登録に向けた活動の上で非常に重要な意味を持つ。このため、テーマ3「Sustainability through traditional knowledge(伝統的知識を通じた持続可能性)」のうち「3-2 Value of traditional knowledge and practices as the basis for balanced technological, innovative development programs and sustainable development(均衡のとれた技術的・革新的開発プログラムや持続可能な開発の基盤となる伝統的知識や慣習の価値)」に対し、「Traditional Practices Protecting the Sacred Island of Okinoshima for Over 1600 Years(「神宿る島」沖ノ島を1600年以上守り続ける伝統的慣習)」を提案したところ、シンポジウムにおけるプレゼンテーションの機会を得ることができた。

2. 作成の過程

この論文とプレゼンテーションでは、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」における伝統的知識を通じた持続可能性について、沖ノ島を守り続けてきた禁忌をはじめとする地元の漁師の方々の慣習に焦点を当てることとした。

論文投稿者の半数は欧州から、3割はアメリカとアジアから、残りの2割は中東とアフリカからという分布が示す通り、読み手や聞き手は日本のことをあまり詳しく知らない人々である。2013年に開催した日本イコモス国内委員会理事会と「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議との意見交換会では、古代祭祀に遡る日本固有の信仰の形成過程を示す本資産の価値を海外の人々に理解してもらうことは容易ではない、との指摘を受けている。そこで、英語の論文とプレゼンテーションの作成にあたり、報告するべき情報の絞り込みと提示の順番を工夫するとともに、英語表現が内容に相応しいレベルとなるよう準備した。

1）紹介の手法

起承転結のある日本語の文章と異なり、多民族、多宗教の人々で構成されたグローバルな環境の縮図であるアメリカでは文章の構成は、まず冒頭に論旨を述べ、ここで何を述べたいのかを明確にする。その後に補足情報が続き、最後に改めて結論をまとめる。比較的に均一な共通認識を前提とした日本国内とは状況が異なり、はじめに何を言いたいのか伝えなければ人々が話についていけなくなることに配慮した順番といえよう。グローバルな環境ではこの順番が望ましい。

また、本資産、あるいは本資産を守る伝統的知識や慣習の価値を伝えるための論文やプレゼンテーションの作成とは、いわゆるマーケティング活動の一環である。マーケティングとは、販売などの促進を目的として、製品、サービス、ブランドの価値について顧客とコミュニケーションをとること（Marketing is communicating a value of product, service, or brand to customers, for the purpose of promoting or selling that product, service, or brand.）と定義される。日本では一般的に技術で優れた良いモノを作ればよいという志向が強く、顧客や市場との関係がないがしろにされやすい。マーケティングという言葉も販売や営業活動（Sales）と同義のように使われ定着していない。日本の論文やプレゼンテーションでは簡単に説明するよりも、むしろ難しい用語を多用した方が、信憑性が高まり信頼されやすい場面すらある。その結果、情報は一方通行になりやすく、コミュニケーションはとりにくい。

一方で、アメリカ、あるいはグローバルには、技術が良くても売れなければ意味がなく、難しいものは敬遠される傾向にある。よって、マーケティングも技術開発と同様に重視され、伝えたい価値を簡潔に、わかりやすく、覚えやすく、双方向にコミュニケーションをとることが求められる。その手法の一つとして、プレセンテーションでは競争環境で他の多くの情報の中に埋没しないよう、Problem（問題提起）-Solution（解決方法）-Result（期待効果）の順番で提示することが効果的だとされる。情報の受け手に「この話は自分に関係がある、自分も同じ問題を抱えている」と思わせるよう問題提起し、「あったらいいな」ではなく、「なくてはならない」程の必要性を提示する。情報は満遍なく盛り込んで全てを解説するよりも、関心の高い人とは後で詳しくコミュニケーションをとれば良い。冒頭から自己紹介や価値の説明から入ると、もともと関心を持たない人々を引き込むことに失敗するからである。

今回の論文とプレセンテーションでは、地元漁師の慣習に焦点を当てているが、伝統的慣習を徹底的に印象付けるよりも、目的は本資産を適切に紹介することにある。そこで、人々の関心を十分に引きつけること、次に本資産の伝えるべき概要や価値を説明し、続いてそれらを守る伝統的知識や慣習を説明する順とした。

まず、本資産の重要性を感覚的に理解してもらうために、沖ノ島祭祀遺跡が「20世紀の奇跡」と称されたことをタイトルとし、出土した8万点の御神宝について触れると共に、500年に及ぶ古代祭祀の変遷と1600年に渡り現代まで守られてきたという2つの数字を強調した。中心となる伝統的知識や慣習の説明についても関心を引くことを優先し、前段で禁忌の具体例を交えて紹介し、禊はかつて1週間もかけていたこと、黒田長政が祟りにあったこと等、特徴的な事例を紹介した。また、地元の漁師の信仰により受け継がれ守られてきたことについて、「沖ノ島仲間」や「みあれ祭」といった事例を紹介することでわかりやすく伝えるとともに、40年前の発掘調査で存在が明るみになった以降でさえ地元の伝統的慣習が有効であることを強調している。

2）翻訳の手法

日本語の情報を英語で海外に紹介する場合、一般的には英語ができる日本人が翻訳し、それをネイティブが文法や英語として不自然な言い回しが無いかを確認すれば十分だとされる。ところが、こういった成果品を海外で扱う場面では、現地の人の修正を要することがほとんどである。理由の一つは、その情報が扱われる現地の場面や視点が十分に想定されていないことであり、もう一つは、翻訳者の英語表現にも限界があることである。

上記の1）紹介の手法では、アメリカにおける文章の順序やマーケティングにおけるプレゼンテーションの手順について一部を概説したが、伝えたいコンテンツに詳しい日本人が作文し、その作文を英語が得意な日本人が忠実に翻訳し、その英語をネイティブが確認しただけでは、海外で実際に使われる個々の場面を想定した観点が十分に盛り込まれにくい。日本における日本人に対する説明の流れが、ほぼそのまま英単語に置き換えられるだけとなり、現地の状況に対応した情報とはならない。

翻訳者の英語表現については、いくら英語が堪能でも日本語中心の環境に居る人よりも英語だけの環境に長年居る人の方が、千差万別の言い回しの中から、より巧みな選択肢を選ぶ可能性が高い。前述の通り、本資産の価値を海外の人々に確実に伝えることは難しい作業である。言葉は生き物であり、特定の分野の旬な言い回しは現地で精通した人に頼る必要がある。

そこで、今回の翻訳の手順は、原文の日本語（および研究論文等から転用されてきた英語）を、世界遺産登録に精通した日本人が全体を通じて英語の文章として一次翻訳するだけでなく、マーケティングの観点で構成も部分修正しながら、日本語の古文にも通じたアメリカ人のプレゼンテーション指導者が日本語と英語を付き合わせて二次翻訳した。これにより伝えるべき本資産の価値が、わかりやすく相応しい英語表現で伝わることを目指した。

個別の工夫としては、全体的にわかりやすい印象を与えるために英語で意味をなさない固有名詞の使用をなるべく少なくし、固有名詞が必要な場合も意味を補足するようにした。地名では九州や福岡を宗像に言い換え、岩上祭祀など4段階の祭祀名を使わず、宗像大社辺津宮など長い名称は、三宮の名称を優先することで覚えやすくした。また、日本語に特有の主語や目的語等が曖昧な箇所や抽象的な表現については元の日本語に立ち返った。例えば「信仰の発展」といった場合に、信仰はそもそも発展（develop）するのかといった議論等があった。

3. 報告の結果

学術シンポジウムへの投稿件数1296件のうち発表機会を得た論文は168件(13%)だった。そのうちテーマ3については、投稿総数158件のうち32件(20%)が発表の機会を得た。イコモス国際学術委員会のもとテーマ3共同議長のピエトロ・ロウリアーノ氏(ユネスコ・コンサルタント)とピーター・コックス氏(イコモス・アイルランド元会長)、およびイタリア、ベナン、サウジアラビア、太平洋諸島、オーストラリア、ベルギー、スペインの7名により投稿論文は選考された。

学術シンポジウムは5つの部会を同時開催し、テーマ3は共同議長による進行のもと20件が発表した。聴衆は50から80名程度と大規模ではないが、ペツェット・イコモス前会長(1999-2008年)をはじめ、モス・前モンタナ州上院議員、ICCROMプロジェクトマネージャーのガミニ・ウィジェスリヤ氏、中国イコモス副代表のル・ズー氏をはじめとする世界の専門家の重鎮達が熱心に聴講する場となり、発表の後に討議にも加わった。

本資産の発表に対してロウリアーノ議長から高い評価のコメントがあり、会場からはイコモスが「伝統的知識」の中で宗教遺産を取り上げたことの重要性を評価する声があがった。

今回の報告は、本資産の価値を海外の人々に伝える絶好の機会となったが、この経験を活かし、世界遺産登録後を見据え常識の異なる世界の人々に対し、本資産の価値をいかにわかりやすく解説していくかひきつづき研究していく必要がある。

イコモスへの提出論文(英文)

Traditional Practices Protecting the Sacred Island of Okinoshima for Over 1600 Years

OKADERA Miki (*), NAKAYA Ryuzo (**)

(*) World Heritage Division, Fukuoka Prefectural Government
7-7 Higashikoen, Hakata-ku, Fukuoka 812-8577, Japan,+81-92-643-3162,
okadera-m4929@pref.fukuoka.lg.jp
(**) World Heritage Division, Fukuoka Prefectural Government
7-7 Higashikoen, Hakata-ku, Fukuoka 812-8577, Japan, +81-92-643-3162,
nakaya-r2409@pref.fukuoka.lg.jp

Abstract

Traditional practices are quite effective even today in protecting living archaeological ritual sites such as those on the sacred island of Okinoshima in Japan. Intact archaeological ritual sites, which have been protected by taboos, were found on the island 40 years ago. Taboos related to this sacred island have kept people away and contributed to protecting the island's heritage for over 1600 years. These taboos blended with the local people's lives and traditional customs. This example illustrates

how effectively traditional practices can contribute to the protection and preservation of living religious heritage and the creation of a sustainable way of life.

Keywords: taboos, sacred island, ritual archaeological site, local fishermen, Shinto Shrine

1. Okinoshima, A Miracle in the 20th Century

Okinoshima Island, the location of an especially sacred shrine since prehistoric times, lies on one of the most important ancient sea routes in East Asia, between the Munakata region of Japan and the southeastern tip of the Korean Peninsula (fig.1). Archaeological excavations conducted from 1954 to 1971 revealed that rituals were performed on the island from the late 4th century to the end of the 9th century. The period of approximately 500 years of rituals on the island overlaps with the historical epoch when the first centralized state was formed on the Japanese archipelago through overseas interchange. The people who lived in the Munakata region conducted rituals on the island to pray for success in their interactions with East Asian countries and for safe voyages. This archaeological discovery was called "a miracle in the 20th century" by Japanese archaeologists and reverberated throughout the country. This site is significant not only because it chronicles the transformation of ancient rituals over a period of 500 years, but also because it has been preserved for over 1600 years to the present day. The sacred island of Okinoshima as an archaeological site is indispensable to understanding the history of Japan. Efforts aiming at its inscription on the UNESCO World Heritage List have been ongoing since 2009.

Eighty thousand artifacts of unrivaled abundance and quality, designated a National Treasure of Japan, have been excavated from the sites. Okinoshima has been called "a treasure house of the sea," comparable to the Shosoin treasure house in Nara, the ancient capital of Japan. These artifacts are of great archaeological value, as they constitute unique, intact, tangible evidence of the chronological development of ancient rituals. Furthermore, some of these artifacts were brought from outside of Japan. These objects include a gold finger ring and gilt-bronze harnesses from the Silla Dynasty of Korea, a Tang Dynasty China-style tricolored bottle-shaped vase, gilt-bronze dragon heads presumably produced in China, and fragments of a crystal-glass bowl arriving from Persia via the Silk Roads.

The sacred island of Okinoshima has been protected by taboos. Though this site became very famous after the scientific excavation was conducted, it has been protected by the local people and remains as it used to be. The reason that this heritage site has been so well preserved is deeply related not only to the fact that the island itself is worshipped as a god, but also to the taboos which have blended with local traditional practices. That the faith is still living today makes it even more special. The natural environment of Okinoshima Island has also been protected, and the island is home to rare native subtropical plant species. Today we can still see the landscape much as it was at the time when traditional rituals were conducted in ancient times.

2. History of Worship

The archaeological ritual sites are located on the southern side of Okinoshima Island. Twenty-two sites have been identified in an area where gigantic rocks exist. On-site surveys confirmed that the rituals went through 4 stages of transformation. The location of the rituals changed over time from the top of the massive rocks to places removed from them. In the first stage (from late 4th century to early 5th century), rituals were performed on top of the massive rocks to which ancient people believed deities would descend from the heavens. Artifacts that were usually placed inside mounded tombs were found at altars on top of the rocks. In the second stage (from late 5th century to 7th century), rituals were performed in the shade of overhanging rocks. Altars were prepared beneath the rocks in order to make votive offerings to deities. In the third stage (from late 7th century to 8th century), rituals were performed partly in the shade of the rocks. This was a transition period when rituals were performed at a short distance from the shade of the rocks. This period coincided with the establishment of the first centralized government in Japan. In the fourth stage (from 8th century to 9th century), rituals were performed in the open air, a flat area some distance from the massive rocks. Artifacts produced exclusively for rituals were offered to the deity.

By the latter half of the 7th century, when the rituals began to be performed away from the rocks, the spiritual space extended to three directly-aligned distant places: Okitsu-miya on Okinoshima Island, which is the original site and 60 km away from the mainland; Nakatsu-miya on Oshima Island, 7 km away from the mainland; and Hetsu-miya on the mainland. According to the Kojiki and the Nihonshoki, the oldest extant books on Japanese history and mythology, Amaterasu (the Sun Goddess) and her brother Susanowo performed the Ukei (vow) ritual to determine Susanowo's righteousness by exchanging a sword and beads. Amaterasu took Susanowo's sword, purified it with sacred water, chewed it in her mouth, and blew it out with her breath. From her breath emerged the Three Goddesses of Munakata. They descended to the sites of Okitsu-miya, Nakatsu-miya, and Hetsu-miya respectively, where the Munakata clan enshrined them as guardian deities of the marine route. The worship of the Three Goddesses of Munakata collectively and integrally centered on one Shinto shrine, Munakata Taisha, before it spread out to approximately 6,000 Shinto shrines throughout Japan where it continues to this day.

3. Taboos

Okinoshima Island has been worshipped itself as a god and there are many traditional customs connected to this worship. Although most of these customs are not seriously demanding, there are some strict taboos. The following customs represent important taboos related to the island. These taboos continue to be respected today.

1) Misogi (purification/ritual ablution): Any person setting foot on the island must first bathe naked in the seawater to purify himself. Although people did not live on Okinoshima Island or at Okitsu-miya in the past, the Fukuoka Domain deployed guards to stay on Okinoshima Island and watch over it in

50-day shifts starting in 1639 (according to the historical document, Chikuzen-no-Kuni Shoku Fudoki). This led to a record of the practices of Misogi, which continue today. Any person visiting Okinoshima Island must first wade into the sea and after praying at the Shosammisha shrine, purify his body with the seawater for a period of 7 days. On the 8th day, he is finally permitted to pay a visit to the Okitsu-miya Shrine. This purification practice is also found in the Okitsushima Sakimori Diary, written by AOYAGI Tanenobu, who traveled to the island as a guard in 1794.

2) No Women Admitted: No women are permitted to land on the island and only a very limited number of men are allowed to visit the island for a festival held every year on May 27. No one can enter the island without the permission of Munakata Taisha even today. Laymen are only allowed to offer prayers at Okitsu-miya once a year on May 27 during the Okitsu-miya Grand Festival. Approximately 200 men land on the island, but even at this time they bathe naked in the seawater to purify themselves before landing. The prohibition of women from entering the island was likely intended to keep women away from sea voyages due to their danger and difficulty.

3) Removal Prohibited: Removal of anything—twigs, grass, or even a pebble—from Okinoshima Island is prohibited. The taboo against taking any treasures from the island was broken by the order of KURODA Nagamasa, Lord of the Fukuoka Domain, in 1609. This incident is recorded in the historical document, Chikuzen Shoku Shosha Engi Okitsu-Miya Gojiryakusho, which says that, when KURODA Nagamasa, the leader of the Kuroda clan, took over the Chikuzen region in 1600, he heard about the existence of Okinoshima Island, where there were abundant secret treasures. He ordered the treasures be collected, but the people did not want to go to Okinoshima Island because of their fear of the gods. Nagamasa instead sent a Christian missionary to Okinoshima Island. When weaving looms and other items were brought to Nagamasa' s castle, a bright light blazed in the sky and the ground rumbled. As a result, he returned those items to the island. From that time up to the early modern period, the island was watched over by the Kuroda family, who governed Chikuzen Province, the western part of present-day Fukuoka Prefecture. Thanks to this tradition, people have been kept away from the island and the ritual sites and treasures have been preserved.

4) Oiwazu-sama (Vow of Silence): One must never speak a word about what one has seen or heard on Okinoshima Island. Only a very small amount of information about Okinoshima Island was made available in the early modern period, and nothing was written in historical documents about the important ritual sites. That indicates how carefully the vow of silence was respected. However, this particular taboo is no longer in effect today. The turning point was the archaeological excavation of the Okinoshima ritual sites 40 years ago. Today, efforts have been made to disseminate the facts and understanding of the value of the sacred island to a wide audience in order to protect it as a cultural heritage site.

5) Imikotoba (taboo words): Certain words must not be uttered when on Okinoshima Island. Instead, alternative expressions are used. References to imikotoba are regularly made in historical records related to taboos. What they have in common is the abhorrence of "death," "blood," and "(the meat of) four-footed animals." Due to the difference in terms and words, imikotoba on Okinoshima Island is unique. Although it is hard to pinpoint the origin of these taboo words, written records appeared in 1704. Therefore, this taboo can be dated to the early Edo period (1600-1868) along with the prohibition of the removal of items from the island. Also, as the Okinoshima Sakimori Diary says, "everything was decided by fishermen." It was not the priests of the shrine but the local fishermen who passed down the tradition of taboo words over time.

6) Taboo Foods: Eating the meat of four-footed animals (beef, for example) is prohibited on Okinoshima Island. Four-footed animals like horses and cows are valuable animals essential to farming. Since Shintoism is a religion developed according to the agricultural calendar, there is a custom of avoiding eating animals related with agriculture.

As mentioned above, we can find records of taboos starting in the 17th century. However, considering the excellent state of preservation of the archaeological ritual sites on Okinoshima Island, it is logical to conclude that the associated taboos have been duly respected for a much longer period of time. Purification ceremonies cleanse the people of impurities. The custom of avoiding taboo words is based on Shintoist thought about defilement: inauspicious words should not be uttered in a sacred place. These are regarded as religious and cultural customs. On the other hand, there are customs that strictly prohibit a certain type of act or behavior: the prohibition of taking anything away from the island and the prohibition of entry onto the island. Although these are very simple codes, they have been effective in protecting the sacred island for over 1600 years. The taboo prohibiting people from talking about what has been seen or heard on the island is also thought to have contributed to protecting the natural landscape and the precious heritage of the island by restricting the disclosure of any information about the island.

4. Life and Belief

Okinoshima Island is a sacred place for the local people who control the sea around the island. The worship of the sacred island has been nurtured and passed down to the present day by the people of the Munakata region.

The Munakata clan dominated the marine route to the Asian mainland and performed rituals on Okinoshima Island starting in the 4th century. The Munakata clan produced head priests for the Munakata Shrine and played a leading role in overseas trade until the medieval period. Although the lineage of the family of the head priest was disrupted in the late 16th century, local people have continued to maintain their faith in the goddesses.

The people of the Munakata region, especially on Oshima Island, mainly live on fishing. Since Okinoshima Island's coastal area is abundant with fish, they call the island a "treasure island," and even regard Okinoshima Island as their lifeline. Okinoshima Island is surrounded by good fishing waters. At the same time, the waves are high immediately around the island and it is frequently dangerous. Therefore, a certain set of standards for carrying out fishing around Okinoshima Island has been adopted by local fishermen. To become a member of the "Okinoshima Nakama (comrades)" and be given permission to fish near the island, one must not only possess excellent skills in fishing and navigation, but also have good character. If it is too rough to fish, fishermen clean the Okitsu-miya shrine on Okinoshima Island. Moreover, they offer fish to the goddess of Okitsu-miya. Fishermen do not forget to daily show their gratitude to the goddess. Not only does Okinoshima Island bring a bountiful catch of fish, but it also serves as the guardian "deity" that protects the lives of fishermen.

The Miare festival is an important festival in the Munakata region. This festival is held to mark the first day of the "Autumn Grand Festival" where thanksgivings are offered to the nation's goddesses of peace for a good harvest and the abundance of fish. This is the most important festival at the Munakata Taisha shrine. The Miare festival begins on October 1. The festival's purpose is to invite and welcome the Goddesses of Okitsu-miya (Tagorihime-no-Kami) on Okinoshima Island and Nakatsu-miya (Tagitsuhime-no-Kami) on Oshima Island to meet the Goddess of Hetsu-miya (Ichikishima-hime-no-Kami) on the mainland. About one month before the festival, Shinto priests go to Okinoshima Island to welcome and take Tagorihime-no-Kami to Oshima Island. The goddess spends a few days at Nakatsu-miya on Oshima Island on the way to Hetsu-miya on the mainland. On the day of the festival, the priests carry Tagorihime-no-Kami and Tagitsuhime-no-Kami in portable shrines to the port of Oshima Island. Then they ride on special ships called Gozasen (the Munakata goddess ships) and head to Konominato Port on the mainland. Approximately 200 fishing boats ornamented with colorful flags and various sails accompany the Gozasen for the 7 km from Oshima Island to Konominato Port.

The spectacular Miare festival is famous throughout Japan. Near Konominato Port, Ichikishima-hime-no-Kami is waiting on her Gozasen for her sister goddesses. Once they are reunited, the three Gozasen boats stop to say farewell to the accompanying boats as the accompanying boats turn slowly around the three Gozasen, throwing money onto them. After the Gozazen have landed and performed a ceremony at Tongu, the three goddesses head to Hetsu-miya in a procession of vehicles. From there, they are carried up to the main shrine and are placed there, beginning the ceremonies of the Autumn Grand Festival.

The present-day Miare festival originates from the medieval "Minagate" ritual and was revived in 1962. This event is known for its dynamism and excitement, and it symbolically expresses the relationship between the fishermen and their faith. The fishermen of this region are the most devout believers and keepers of the faith in the Three Goddesses. The Miare festival shows clearly that this heritage has been inherited as a dynamic living heritage by the community.

5. Conclusion

Even today, local fishermen are devout worshippers of the sacred island of Okinoshima and the Three Goddesses of Munakata. The fishermen engage in work that is fraught with accidents and danger, and they firmly believe that by strictly observing the contracts with their goddesses, a good haul of fish and safety on the seas will be guaranteed. Okinoshima Island is not a solitary island in the distant ocean. Although people have been fishing and boats have been going around the island since ancient times, the archaeological sites of the island have been well preserved. Moreover, forty years have already passed since the last excavation of the Okinoshima archaeological ritual sites was conducted. Nevertheless, Okinoshima Island has continued to be protected. This is an astonishingly rare occurrence in contemporary society. The taboos of traditional customs made it possible to keep visitors away from Okinoshima Island. Local fishermen who believe the Munakata Three Goddesses have continued to respect the taboos and protect the sacred island. This tradition is deeply connected with the life of the people who live with the heritage and contribute to its protection. This living religious heritage will continue to be protected far into the future.

Bibliography

HATTORI Hideo. 2011. History and Topography of Oronoshima, Okinoshima and Oshima. "Okinoshima Island and Related Sites in the Munakata Region" Study Report I, 2011, pp. 169-220.

Simon KANER. 2012. The Archaeology of Religion and Ritual Prehistoric Japanese Archipelago, The Oxford Handbook of the Archaeology of Ritual & Religion, pp. 464-466.

Simon KANER. 2012. Okinoshima in World Perspective: Weaving Narratives of Ritual, Politics and Exchange"Okinoshima Island and Related Sites in the Munakata Region" Study Report II/2, pp. 49-82.

MATSUMAE Taheshi. 1993. Early Kami Worship, The Cambridge History of Japan, Volume 1, Ancient Japan, pp. 317-358.

MIZOGUCHI Koji 2013. The Archaeology of Japan: From the Earliest Rice Farming Villages to the Rise of the State, Cambridge World Archaeology.

MORI Hiroko. 2011. Intangible Folk Cultural Properties of Munakata Grand Shrine. "Okinoshima Island and Related Sites in the Munakata Region" Study Report I, 2011, pp. 253-336.

OKAZAKI Takeshi.1993, Japan and the Continent, TheCambridge History of Japan, Volume 1, Ancient Japan, pp. 268-316.

Werner STEINHAUS. 2012. Okinoshima and State Formation,"Okinoshima Island and Related Sites in the Munakata Region" Study Report II/2, pp. 94-11

イコモスへの提出論文（和文）

「「神宿る島」沖ノ島を1600年以上守り続ける伝統的慣習」（和訳）

概要

文化的慣習は今日でも生きている祭祀遺跡を保護するのに非常に効果的である。その良い例が、日本の「神宿る島」沖ノ島である。禁忌に守り続けられてきた手つかずの祭祀遺跡は40年以上前に発見された。1600年以上、禁忌は人々を寄せ付けず、島の祭祀遺跡を守るのに貢献してきた。この事例は、どのように文化的伝統は生きている信仰の遺産を保護・保存し、持続可能な生活を作り出すのに貢献するのかを示す好例である。

キーワード:禁忌、「神宿る島」、祭祀遺跡、漁民、神社

1.沖ノ島、20世紀の奇跡

先史時代以来、特に聖なる場所であった沖ノ島は、朝鮮半島の南東端と日本の宗像地域の間をつなぐ東アジアにおける最も重要な航海ルート上の一つに位置する。1954～1971年に行なわれた発掘調査は4世紀前半から9世紀末にかけて島で行われた祭祀の姿を明らかにした。この祭祀が行なわれたおよそ500年間という時代は、海を越えた交流によって日本列島において初めて国家が形成された時期にあたる。宗像地域に暮らしていた人々は沖ノ島の祭祀を担い、東アジアの国々との交流の成就と航海安全を願って祭祀を行なった。この考古学上の発見は「20世紀の奇跡」と呼ばれ、日本中に衝撃を与えた。この遺跡は500年にわたる祭祀の変遷を段階的に終える資産であるだけでなく、今日まで1600年以上にわたり、よく保存されて来たことこそに意味がある。また、「神宿る島」沖ノ島は日本の歴史を考える上で欠く事の出来ない遺跡である。それゆえユネスコの世界遺産へ登録を目指した取り組みが2009年から行なわれている。

祭祀遺跡より出土した8万点の質量ともに卓越した遺物は、すべて国宝に指定されている。このことから沖ノ島は、奈良の「正倉院」に因んで「海の正倉院」と呼ばれている。これらの遺物は考古学的な価値が高いだけでなく、古代祭祀の変遷を年代的に示す、類のない手つかずの証拠である。これらの中には、古代韓国の新羅からもたらされた金製指輪と金銅製馬具や、中国からとされる唐三彩の花瓶片、金銅製龍頭、シルクロードを通じてもたらされたとされるガラス碗破片等が含まれている。

この「神宿る島」沖ノ島は禁忌によって守られている。学術的な発掘調査の後、この遺跡は広く知られるようになったが、以前と同じように地元の人々によって守り続けられている。この遺跡の保存状態がいいのは、この島そのものが信仰の対象であるということだけではなく、伝統的な慣習である禁忌が深く関わっている。今日まで続く信仰はそれをさらに特別なものにしている。沖ノ島の自然環境もまたよく守られており、希少な亜熱帯植物が自生している。今日でもなお古代において祭祀が行われた時とほぼ同じ風景を目にすることが出来る。

2.信仰の歴史

祭祀遺跡は沖ノ島の南側に位置し、巨石群を中心に22の遺跡が確認されている。調査では祭祀が四段階に変遷することが確認されている。祭祀の場所は巨岩の最高所から巨岩から離れた場所へと、時とともに変化する。第1段階(4世紀後半から5世紀前半)は岩上祭祀であり、祭祀は巨岩の最も高い場所、古代の人々が天から神がおりてくると信じていた場所で行われた。この段階では、古墳の副葬品と共通する物が岩上の祭壇で発見された。第2段階(5世紀後葉から7世紀)は岩陰祭祀であり、張り出した巨岩の陰で行なわれた。神へ奉献品を捧げる為に岩の下に祭壇が設けられた。第3段階(7世紀後半から8世紀)は半岩陰・半露天祭祀であり、一部岩陰にかかる場所で祭祀が行なわれた。この時期は、岩陰から少し離れた場所で祭祀が行なわれる過渡期にあたり、日本の国家が成立する時期と一致する。第4段階(8世紀から9世紀)は巨岩からやや離れた平坦な場所、露天で行なわれた。この段階では祭祀の為だけに作られた物が神に捧げられるようになる。

巨岩から離れて祭祀が行なわれる7世紀後半には、一直線に並ぶ三つの離れた場所に信仰空間が拡大する。もともと祭祀が行われていた本土から60km離れた沖ノ島の沖津宮に加えて、本土から7km離れた大島の中津宮、本土に位置する辺津宮の2ヶ所でも祭祀が行なわれるようになる。日本における最古の書物である古事記と日本書紀には神話が記されており、アマテラス(太陽神)と弟のスサノオの誓約(ウケヒ)について書かれている。須佐之男命は邪心がないことを証明する為に、剣を勾玉と交換して占いを行なった。アマテラスはスサノオの剣をとり、天真名井で清めてから、口にして噛み砕き、息吹とともに吹き出した。この時、アマテラスの息吹から生まれたのが宗像三女神であり、それぞれ沖津宮、中津宮、辺津宮に降臨し、海の航路の守り主として宗像氏が祀ることとなった。宗像三女神への信仰は、このようにして成立した宗像大社を中心として日本全国へ広がり約6000社の神社で祀られており、その信仰は今日まで続いている。

3.禁忌

沖ノ島は島自体が信仰の対象であるが、島には多くの文化的慣習が残されている。多くは縁起をかつぐものであるが、中には強く何かを禁じるルールであるタブーも含まれている。以下は、現在も守られている重要な禁忌である。これらの禁忌は今も大事に守られている。

1.みそぎ(禊):島へ足を踏み入れる前に裸で海水に浸かり身体を清めなければならない。

沖ノ島(沖津宮)は過去、人は住んでいなかったが、1639年より福岡藩は50日交代で番人を置き、見張りをするようになった(筑前国続風土記)。これが現在に伝わるみそぎの最古の記録である。初めて沖ノ島へ来たものは最初に海へ入らなければならず、正三位社で祈った後は7日間海水で身体を清める。8日目にやっと沖津宮への参拝が許されるのである。この禊の習慣は1794年に防人としてこの島へ渡った青柳種信『沖津宮防人日記』にも書かれている。

2.女人禁制:女性は島への上陸は許されておらず、男性も毎年5月27日に行なわれる祭の時のみ許される。

現在でも宗像大社の許可なしに何人も島へ立ち入ることはできない。年に一度の5月27日の沖津宮現地大祭の時にのみ沖津宮への参拝が許される。約200名の男性が島へ上陸する、その時でも上陸前の禊を行なう。女性が島へ立ち入ることを禁じるタブーについては、とても危険で困難な海の航海から女性を遠ざけようとする為のものであると言われている。

3.島からものを持ち出すことの禁忌:沖ノ島からは一木一草一石、持ち出してはいけない。

宝物を持ち出してはいけないというこのタブーは、1609年福岡藩主黒田長政によって破られた。この出来事は筑前続諸社縁起沖津宮御事略書に書かれている、黒田家の家長である黒田長政が1600年に筑前へ入国した際、秘密の宝島である沖ノ島の噂を聞いた。彼は宝を取りにいくように命じるが、神を恐れて誰も行こうとしない。そこで長政はクリスチャンを沖ノ島へ送った。機織機や他の神宝が長政の城へ持ち込まれると、天は明光を放ち、地面は揺れるなどの怪異が起き、ついに長政は神宝を島へ返した。その時から近代まで、島は現在の福岡県西部である筑前地域を支配した黒田家の庇護を受けることとなった。この伝統のおかげで島から人々は遠ざけられ、祭祀遺跡と神宝は守られてきた。

4.不言様:沖ノ島で見聞きしたことをしゃべってはいけない。

沖ノ島は「おいわずさま」とも呼ばれる。沖ノ島に関するごくわずかな情報は、近世初期には手に入るようになるが、歴史的な記録には祭祀遺跡のことは何も書かれていない。これは島で見聞きしたことをしゃべってはいけないというタブーがかなり長いこと守られて来たことを裏付けるものではないかと言われている。しかし、このタブーは現在使われていない。その契機となったのが沖ノ島祭祀遺跡の発掘調査である。現在は、「神宿る島」の事実と価値を広く伝えることによって、その文化遺産としての価値を守ろうとしている。

5.忌み言葉:特定の言葉を沖ノ島の中では使ってはいけない。その言葉の代わりに違う表現が使われる。

忌み言葉については禁忌の記録の中では常に触れられている、共通するのが、「死」「血」「尼」「四つ足の動物」はタブーとして忌み嫌われる。表現と言葉の違いにより、沖ノ島の忌み言葉は独特である。忌み言葉の起源を明確にするのは難しいが、忌み言葉について文章で書かれているものは、1704年に現れる。このことから島から何も持ち出してはいけないというタブーと同様に江戸時代の初めにはさかのぼれるのではないかと考えられる。『沖津島防人日記』には、「すべては漁師達によって決められている」と書かれている。忌み言葉を使うのは神社で祭祀を行なう神職ではなく、伝統を長い間受け継いで来た漁師達である。

6.食べ物の禁忌:4つ足の動物(例えば牛肉など)を食べてはいけない。

馬や牛等の四つ足の動物は農耕には特に貴重な動物である。神道は農業の暦にあわせて発展した宗教であり、農耕に関わる動物を食べることを忌避するようになったのである。

これまでみてきたように禁忌が記録で確認されるのは17世紀以降の事である。しかしながら沖ノ島における祭祀遺跡の保存状態が良好に残されてきたことを考えると、これらの禁忌は非常に長い間にわたって守られてきたと考えるのが自然である。禊は汚れを払い、また忌み言葉は聖なる場所で縁起の悪い言葉を発しないという、神道の汚れの思想に基づいており、宗教的な一つの文化的慣習として捉えられる。しかし、行為が制限される慣習には、島からいかなるものも持ち出すことを禁止する禁忌と島への外部の人の立ち入りを禁じる禁忌がある。これらは非常に簡単で単純な掟ではあるが、強い禁忌として1600年聖なる場所を守って来た。また、島で見聞きしたことを話さないのも、島に関する情報をすべて制限することで、島の自然や貴重な遺産を守って来たものと考えられる。

4.生活と信仰

沖ノ島はもともと島の周囲の海を支配する地域の人々の聖なる場所であった。「神宿る島」に対する信仰は高められ、宗像地域の人々によって現在も受け継がれて来ている。

宗像氏はアジア大陸への海路を支配し、4世紀から沖ノ島での祭祀を行なった。宗像氏は宗像大社の宮司を輩出し、中世においても海を越えた交易を主導した。16世紀に宗像大宮司家は断絶するが、地域の人々は神々への信仰を固く守り続けて来た。

宗像地域、特に大島の人々は、現在も漁業を生業にして暮らしている。沖ノ島周辺は魚の宝庫であり、「宝の島」や、「沖ノ島は生命線」とも言われている。沖ノ島は良好な漁場である一方、波の高い沖ノ島周辺での漁は危険と背中合わせである。そのため、沖ノ島周辺で漁をする為に、地元の漁師の間で、ある一定の基準が設けられている。沖ノ島周辺での漁ができるのは「沖ノ島仲間」の資格を得て、漁業や操船の技術が十分なだけでなく、人柄も他の漁師から認められたものだけである。海が荒れて漁に出られない時は、沖津宮の清掃を行ない、さらに、取った魚は沖津宮へ献上する。漁師達は日々感謝を表すのを忘れることはない。沖ノ島は、豊漁をもたらしてくれるだけではなく、漁師の命を守る「神」でもある。

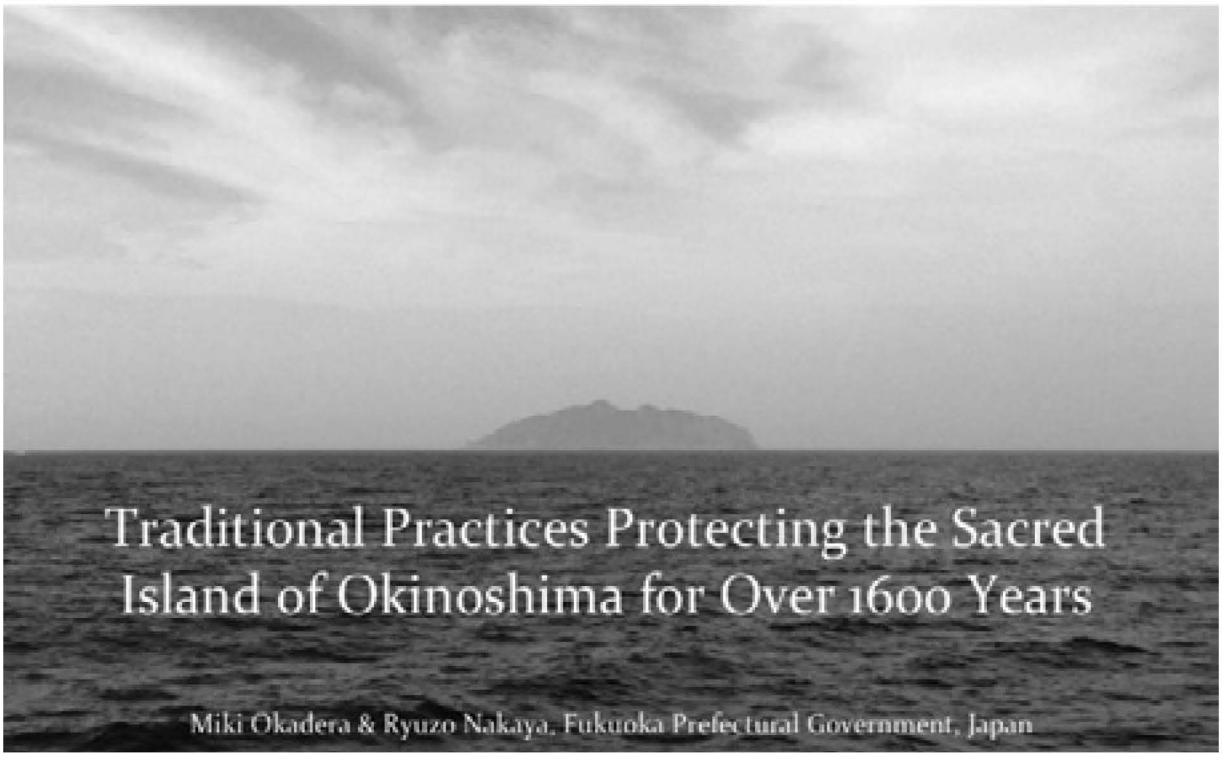
みあれ祭りは宗像地域を代表する祭りであり、国家安泰と豊作と大漁を女神に感謝する秋季大祭の初日に行なわれる。この秋期大祭は、宗像大社にとって一番重要な祭りである。みあれ祭は10月1日に行われ、沖津宮の神（田子姫神）と中津宮の神（湍津姫神）を、辺津宮の神（市杵島姫神）が迎える祭りである。祭りの約1ヶ月前、数名の神職が沖ノ島へ田子姫神を迎えに行き、田子姫神は本土の辺津宮へ行く前に中津宮に数日滞在する。祭りの日、田子姫神と湍津姫神は御神輿で大島港へ運ばれる。そこで御座船（宗像神のための船）に乗り、神湊港へと向かう。大島港から神湊港までは7kmであり、色とりどりの旗で飾られた約200隻の漁船が御座船のお供をする。このみあれ祭は日本国内でも勇壮であることで有名である。神湊港では、市杵島姫神が御座船に乗って二人の妹の神を待っている。ひとたび三女神が集まると、3隻の御座船は止まり、お供の船に別れを告げる。お供の船はゆっくりと御座船の周りを回りながら、御座船に賽銭を投げ入れる。御座船が上陸して頓宮での儀式を終えると、三女神は自動車隊列で辺津宮へ向かう。三女神が本殿へ到着し、そこに据えられると、秋期大祭はいよいよ始まる。

このみあれ祭は中世の御長手神事にもとづくもので1962年に復活した。この祭りは、勇壮なことで有名であるが、漁師と信仰の関係を象徴的に表すものである。宗像の信仰を中心的に支え守っているのは、この地域の漁師である。このようにみあれ祭は、コミュニティによって生き生きとこの資産が受け継がれていることを明確に示している。

5. 結論

今日でも地域の漁師達は沖ノ島と宗像三女神をとても深く信仰している。漁師は常に危険と隣り合わせであり、神との約束である禁忌を固く守ることによって豊漁と海での安全が保証されることを強く信じている。沖ノ島は遠く離れた絶海の孤島ではない。古来より周辺では航海や漁業が行なわれている、にもかかわらず、考古遺跡は非常に良く守られて来た。更に、沖ノ島祭祀遺跡の発掘調査が行なわれて既に40年が過ぎている。しかしながら、沖ノ島は変わることなく守り続けられている。この事例は、現代の情報社会の中で、驚くべきものである。禁忌という文化的慣習は、沖ノ島から人々を遠ざけることを可能にした。宗像三女神を信じる地域の漁師達は、この禁忌を尊重し、島を守り続けている。この伝統は遺産とともに生きる人々の生活と深く関わっており、かつ遺産を守るのに貢献している。この生きている信仰の遺産は人々の生活とともにこれからも守り続けられていくだろう。

口頭発表資料



Traditional practices are quite effective even today in protecting living archaeological ritual sites. I'd like to introduce to you a particular case, which indicates how a sacred island in Japan has been preserved by the traditional practices of the local people.

40 years ago, intact archaeological ritual sites were found on Okinoshima Island, which is 60 km away from the mainland of Japan. Okinoshima, the location of an especially sacred shrine since prehistoric times, lies on one of the most important ancient sea routes in East Asia, between the Munakata region of Japan and the Korean Peninsula.

Traditional practices connected with the island have blended with the local people's lives and kept people away from the island. This has contributed to protecting the island's heritage for over 1600 years. First, I will talk about the sacred island's heritage. Next, I will discuss traditional practices including taboos related to this sacred island. This example illustrates how effectively traditional practices can contribute to the protection and preservation of living religious heritage.

Okinoshima,

A Miracle in the 20th Century

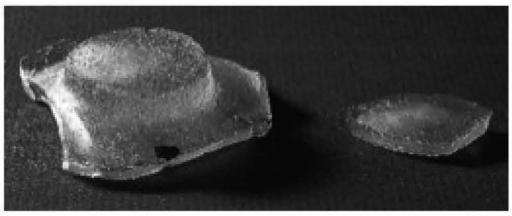
-Chronicle of 500 years transformation of ancient rituals

-Preserved for over 1600 years

Archaeological excavations conducted 40 years ago revealed that rituals were performed on the island from the late 4th century to the end of the 9th century. This period overlaps with the historical epoch when the first centralized state was formed on the Japanese archipelago through overseas interchange. The people who lived in the Munakata region conducted rituals on the island to pray for success in their interactions with East Asian countries and for safe voyages.

This archaeological discovery was called "a miracle in the 20th century" by Japanese archaeologists. This site is significant not only because it chronicles the transformation of ancient rituals over a period of 500 years, but also because it has been preserved for over 1600 years to the present day.

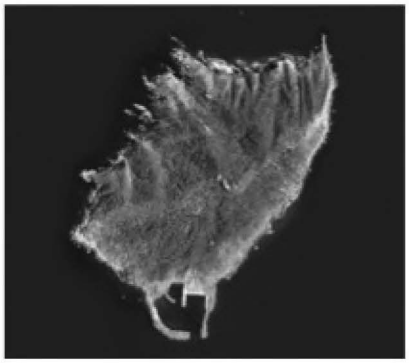
Artifacts of Devotion

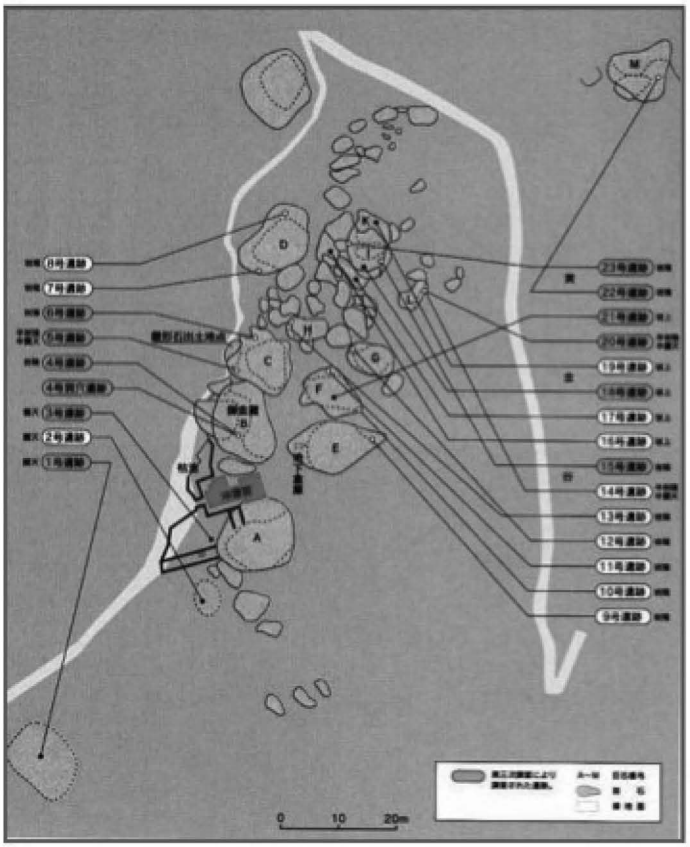


Eighty thousand artifacts of unrivaled abundance and quality, designated as a National Treasure of Japan, have been excavated from the sites. These objects include a gold finger ring and gilt-bronze harnesses from the Silla Dynasty of Korea, a Tang Dynasty China-style vase, gilt-bronze dragon heads presumably produced in China, and fragments of a crystal-glass bowl arriving from Persia via the Silk Roads.

These artifacts are of great archaeological value, not only as tangible evidence of the chronological development of ancient rituals, but also as testimony to the overseas interchange that contributed to the formation of the first centralized state in Japan.

Testimony to the Transformation of Ancient Rituals

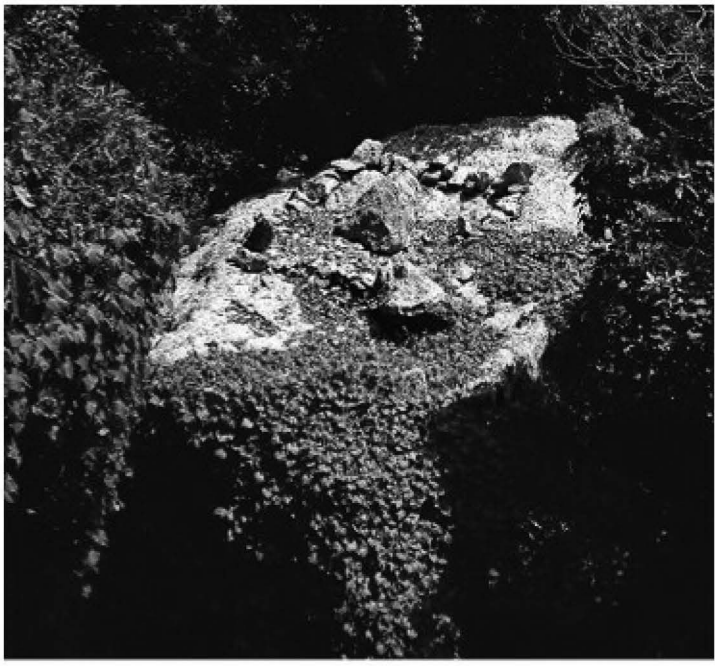




In the first stage, rituals were performed on top of the massive rocks to which ancient people believed deities would descend from the heavens. Artifacts were found at altars on top of the rocks.

First Stage:

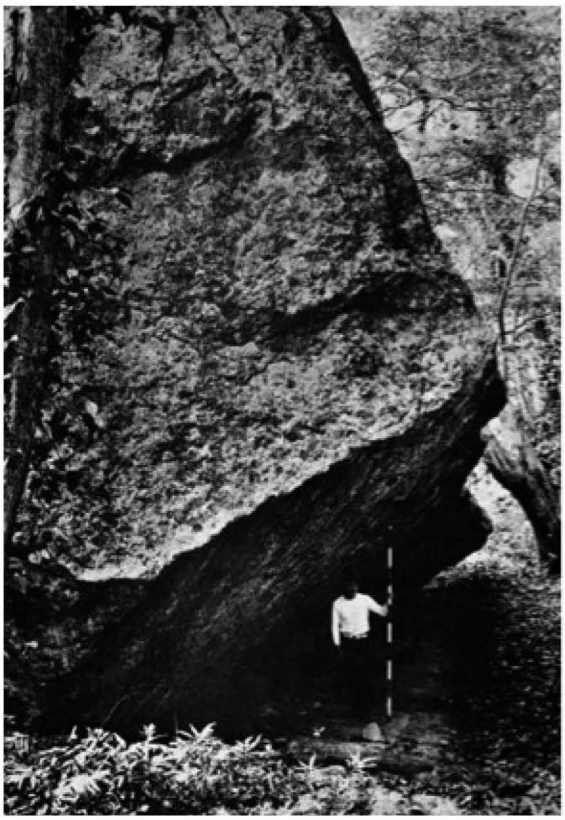
Late 4c to Early 5c



Twenty-two archaeological ritual sites have been identified on the island, in an area where gigantic rocks exist. On-site surveys have confirmed that the rituals went through 4 stages of transformation.

Second Stage:

Late 5c to 7c



In the second stage, rituals were performed in the shade of overhanging rocks. Altars were prepared beneath the rocks in order to make votive offerings to deities.

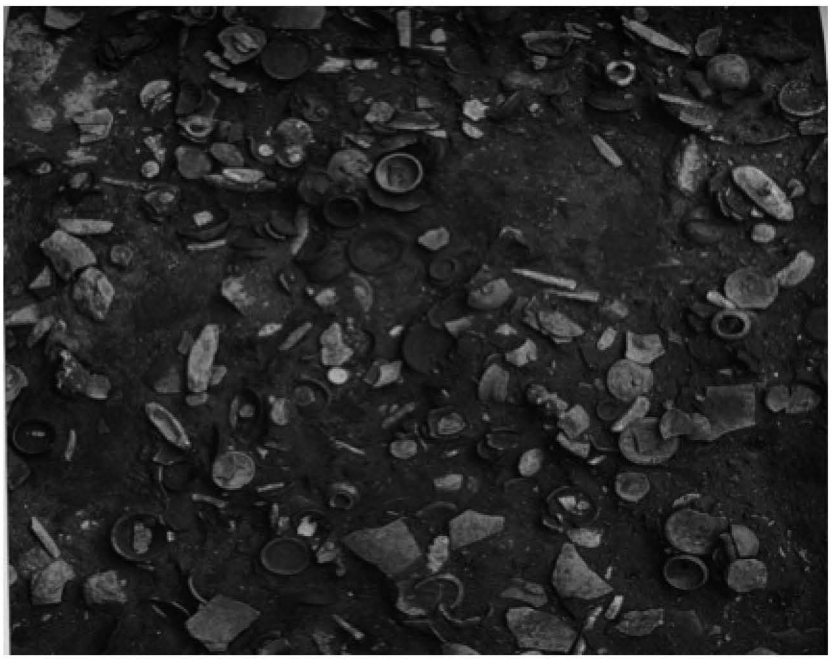
Third Stage:

Late 7c to 8c

In the third stage, rituals were performed partly in the shade of the rocks. This period coincided with the establishment of the first centralized government in Japan.

Fourth Stage:

8c to 9c



In the fourth stage, rituals were performed in the open air, a flat area some distance from the massive rocks. Artifacts produced exclusively for rituals were offered to the deity.

The Birth of the Three Goddesses of Munakata

By the latter half of the 7th century, rituals were also performed on Oshima Island and on the mainland, and the spiritual space extended to these three directly-aligned but distant places. The Three Goddesses of Munakata descended to these sites respectively as guardian deities of the marine route.

The worship of the Three Goddesses collectively and integrally centered on one Shinto shrine, Munakata Taisha, before it spread out to approximately 6,000 shrines throughout Japan where it continues to this day.

Living Heritage

That the faith is still living today makes it even more special.
The spectacular Miare festival is famous throughout Japan. The festival reunites the Three Goddesses once a year where thanksgivings are offered. The Goddesses on the two islands are invited to meet the Goddess on the mainland. Approximately 200 fishing boats ornamented with colorful flags and various sails accompany the goddess ships to the mainland.

This event symbolically expresses the relationship between the fishermen and their faith. The fishermen of this region are the most devout believers and keepers of the faith in the Three Goddesses. The Miare festival shows clearly that this heritage has been inherited as a dynamic living heritage by the community.

The Faith of Local Fishermen

The Munakata people, especially on nearby Oshima Island, mainly live on fishing. They regard Okinoshima Island as their lifeline. Okinoshima is surrounded by good fishing waters. At the same time, the waves are high immediately around the island and it is frequently dangerous. Therefore, a certain set of standards for carrying out fishing around Okinoshima has been adopted by local fishermen. To be given permission to fish near the island, one must not only possess excellent skills in fishing and navigation, but also have good character. Fishermen do not forget to daily show their gratitude to the goddess by cleaning the shrine and offering fishes to the goddess. Not only does Okinoshima bring a bountiful catch of fish but it also serves as the guardian "deity" that protects the lives of fishermen.

Traditional Practices Protecting the Heritage

The reason that this heritage site has been so well preserved for over 1600 years is not only because the island has been worshipped itself as a god but also because there are many traditional customs connected to this worship that have blended with local traditional practices. The following customs represent important taboos related to the island.

Misogi
(purification/ritual ablution)

Any person setting foot on the island must first bathe naked in the seawater to purify himself.
The local lord deployed guards to stay on the island starting in 1639. Based on the record, any person visiting Okinoshima Island must first wade into the sea and purify his body with the seawater for a period of 7 days.

Nowadays, laymen are only allowed to offer prayers on Okinoshima once a year on May 27. Approximately 200 men land on the island, but even at this time they bathe naked in the seawater to purify themselves before landing.

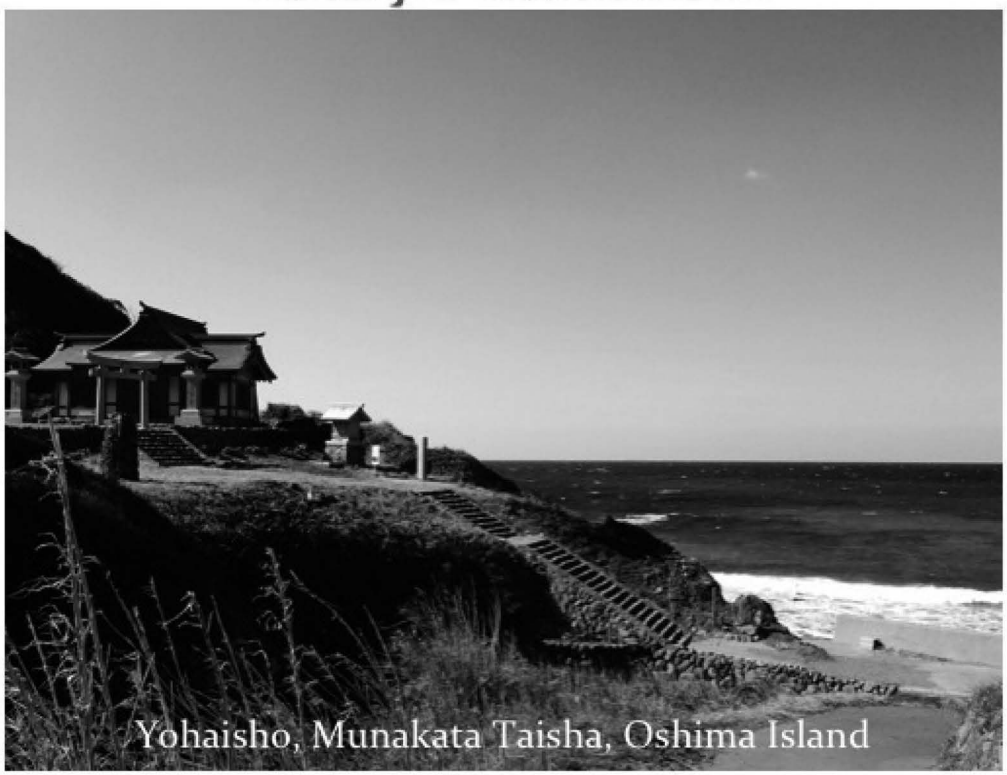
Taboo Foods & Words

Eating the meat of four-footed animals (beef, for example) is prohibited on Okinoshima. Since the Japanese indigenous belief system or Shintoism is a religion developed according to the agricultural calendar, there is a custom of avoiding eating animals essential to farming.

Inauspicious words such as "death," "blood," or "four-footed animals" must not be uttered when on Okinoshima. Instead, alternative expressions are used. It was not the priests of the shrine but the local fishermen who passed down the tradition of taboo words over time.

Purification ceremonies and the custom of avoiding taboo foods or words is based on Shintoist thought about defilement. They have been effective in keeping the island sacred to the present day.

Entry Prohibited

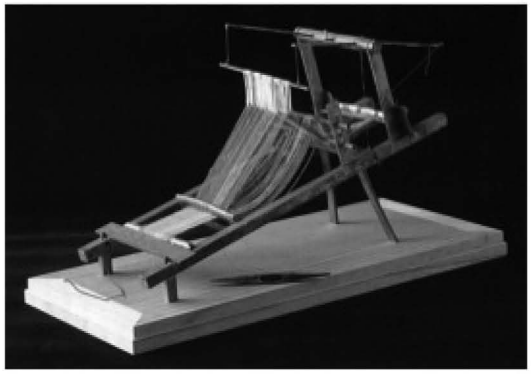

Yohaisho, Munakata Taisha, Oshima Island

No one can enter Okinoshima Island without the permission of Munakata Taisha even today, and furthermore, no women are permitted to land on the island. The prohibition of women from entering the island was likely intended to keep women away from sea voyages due to their danger and difficulty.

For those who wish to worship Okinoshima, Munakata Taisha has a facility named "Yohaisho" on Oshima Island. "Yohai" means "worshipping from afar," and this is a place to worship Okinoshima from a distance of over 50 km.

Removal Prohibited

KURODA Nagamasa, Lord of Fukuoka 1601-1623



Removal of anything—twigs, grass, or even a pebble—from Okinoshima Island is prohibited.

This taboo was broken by the order of the local lord, KURODA Nagamasa, in 1609, when he heard about the existence of Okinoshima Island and the secret treasures. He ordered the treasures be collected, but the people did not want to go to the island because of their fear of the gods. Nagamasa instead sent a Christian missionary to the island. When weaving looms and other items were brought to Nagamasa's castle, a bright light blazed in the sky and the ground rumbled. As a result, he returned those items to the island. From that time up to the early modern period, the island was watched over by the Kuroda family, who governed the area. Thanks to this tradition, people have been kept away from the island and the ritual sites and treasures have been preserved.

Oiwazu-sama (Vow of Silence)

One must never speak a word about what one has seen or heard on Okinoshima Island. The people even refrained from saying the name Okinoshima, and they used other words to refer to the island.
Only a very small amount of information about Okinoshima was made available in the early modern period, and nothing was written in historical documents about the important ritual sites. That indicates how carefully the vow of silence was respected by the local people.
However, this particular taboo is no longer in effect today. The turning point was the excavation 40 years ago. Today, efforts have been made to disseminate the value to a wide audience in order to protect it as a cultural heritage site. Efforts aiming at its inscription on the World Heritage List have been ongoing since 2009.
Although the prohibition of entry and removal, and the vow of silence are very simple codes, they have been effective in protecting the precious heritage for over 1600 years. Considering the excellent state of preservation of the archaeological ritual sites, it is logical to conclude that the associated taboos have been duly respected for a much longer period of time than what we can confirm by historical records.

Conclusion

Okinoshima is an isolated island but not a solitary island. People have been going around the island since ancient times. Boats are getting faster and people are getting easier to access the island, Moreover, the existence of Okinoshima archaeological ritual sites have been disclosed since the excavation was conducted 40 years ago. Furthermore, the number of fishermen has been decreasing due to social changes.

Nevertheless, the archaeological sites on the island have been well preserved to the present day. This is an astonishingly rare occurrence in contemporary society. The taboos of traditional customs made it possible to keep visitors away from Okinoshima. Local fishermen who are devout worshippers of Okinoshima have continued to respect the taboos and protect the sacred island. This tradition is deeply connected with the lives of the people who live with the heritage and contribute to its protection.

I would like to finish by saying that this living religious heritage will continue to be protected far into the future. Thank you for your kind attention.